

2005 年-2007 年 NLGR・HIV 抗体検査会の受検者特性の推移 —受検者への質問紙調査結果から—

研究協力者：金子典代（名古屋市立大学大学院看護学研究科/エイズ予防財団）、
内海眞（高山厚生病院、国立名古屋医療センター）、Angel Life Nagoya(CBO)、
市川誠一（名古屋市立大学大学院看護学研究科）

研究要旨

本研究の目的は、2005 年、2006 年、2007 年の NLGR・HIV 抗体検査受検者に実施した質問紙調査のデータをもとに、受検者の基礎属性や過去の検査受検行動、受検動機、ゲイ向けサービスの利用、性行動とその関連要因の実態の推移を明らかにすることである。

2005 年は 396 名、2006 年は 461 名、2007 年は 519 名からの有効回答を収集し、回収率は 95% を超えていた。基礎属性の分布は 3 年間を通して著しい変化は見られず、東海地域に居住する 20-30 歳代の MSM が最も多く 75% 以上を占めていた。過去 1 年間に HIV 抗体検査を受検したものが 3 年ともに全体の半数近くを占めていたが、その受検場所としては前年の NLGR を挙げているものが最も多く、過去 1 年の検査受検者のうちの 70% 近くを占めていた。生涯初めて検査を受検するものは、受検経験があるものと比較してお友達を通じて検査会を知ったものが多く、友達と一緒に受けるから、情報に触れて心配になったことを受検理由に挙げるものが多かった。Angel Life Nagoya の予防啓発プログラムへの参加や認知は年齢が高い方が高く、携帯系出会い系サイトの利用は若者層の方が高かった。セックス時の併用品や利用するゲイ向け施設等にも経年変化が見られ、薬物の過去 6 ヶ月の使用とゲイバー・クラブの利用は、2005 年と比較して 2007 年は低かった。

生涯で初めて検査を受検するものは毎年約 25% にとどまり、過去の HIV 抗体検査受検経験は、NLGR を挙げるものが毎年最も多く、連続受検者も増加しており、地域での保健所等の検査利用に結びつきにくい実態が明らかとなった。このことは、継続的に無料の臨時検査会を連続実施することの欠点であるとも考えられる。また、臨時に開催する検査会は継続が保障できるものではないため、今後は地域で提供されている検査サービスをより利用しやすいものにすることが求められる。特に 2007 年の調査結果から、MSM の保健所の HIV 抗体検査の受検を希望するものの割合は高く、現在の保健所検査の利用の最も大きな障壁となっている、検査日や時間が限定されていることを解消すれば、より多くの受検者が地域の保健所を利用する可能性が示された。本年度の研究で明らかになった、東海地域に居住する MSM のニーズをふまえ、より MSM が受検しやすい検査体制への整備と利用者拡大に向けた情報提供を行っていく必要がある。

A. 研究目的

2005 年から 2007 年にかけて実施した調査の目的は、主に下記の 3 点である。

1. 検査会の受検者の基礎属性、過去の検

査行動、地域の保健所等のエイズ検査の認知や利用とニーズ、検査会の受検目的、知ったきっかけを明らかにすること

2. 受検者のゲイ向けサービスの利用、CBO活動の認知、陽性者の身近さを明らかにすること
3. 過去 6 ヶ月の性行動、コンドーム使用とリスク認知や予防行動への態度の実態を明らかにすること
4. HIV 陽性や性感染症の既往歴を有するものの性行動、検査受検経験などを明らかにすること

B. 研究方法

2005 年から 2006 年は、受検者の採血終了後にスタッフが質問紙を手渡し、また 2007 年は NLGR・HIV 抗体検査会の 1 日目の受付時に、訓練を受けたスタッフから受検者に対して、質問紙を説明とともに手渡し協力を依頼した。アンケート回答用にスペースを確保し、スペース内での回答への協力を依頼した。質問紙の表紙に研究目的やプライバシーの厳守、研究データの取り扱い方法、学会等で結果を公表すること、参加や回答は自由である旨を明示し、内容を読み同意したもののみに対して回答を依頼した。

質問紙は無記名であり対象者個人の特定につながる情報は含んでいなかった。なお、2005 年、2006 年の研究計画については、名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会より実施の承認を得た。

質問紙の調査項目は年齢や居住地、性的指向などの基本属性、生涯、過去 1 年間の HIV 抗体検査の受検、保健所等の検査の認知、受検、ニーズ、NLGR 検査会の受検動機、情報入手元、ALN 活動の認知や資材受け取り、参加、性行動、コンドーム使用状況、過去 6 ヶ月間に利用した商業施設の種類などであった。

検査行動や受検動機については、有効回答全数を分析対象とした。地域で提供されている保健所等の検査利用、認知、検査へのニーズに関しては、東海地域に居住する MSM のみに限定して分析を行った。性行動に関する項

目は、性指向をゲイまたはバイセクシュアルと自認し、男性と性行為の経験があると回答した MSM のみに限定し分析を実施した。

年齢別の比較を行う際には、年代を 29 歳未満、30-39 歳、40 歳以上の 3 群に分けて分析を行った。生涯の HIV 抗体検査の受検経験別の比較の際は、HIV 抗体検査を生涯で初めて受けるもの、すでに受検した経験があるものの 2 群に分けて分析を行った。分析時にクロス集計を行う際にはカイ二乗検定を用い有意水準は 5%を採用した。以下の研究結果は、3 年間の推移のみに焦点を当てて記載した。

C. 研究結果

1. 受検者の基礎属性

3 年間を通して、受検者の 80-85%が 20-30 歳代を占めていた。居住地は名古屋市、名古屋市を除く愛知県、岐阜県の順であり、その他全国各地に居住するものが受検する傾向も 3 年間変わらなかった。性指向は 3 年間を通してゲイを自認するものが 8 割以上を占め、9-10%がバイセクシュアルであった。

2. HIV 抗体検査の受検経験と認知

1) 過去の HIV 抗体検査受検と受検場所

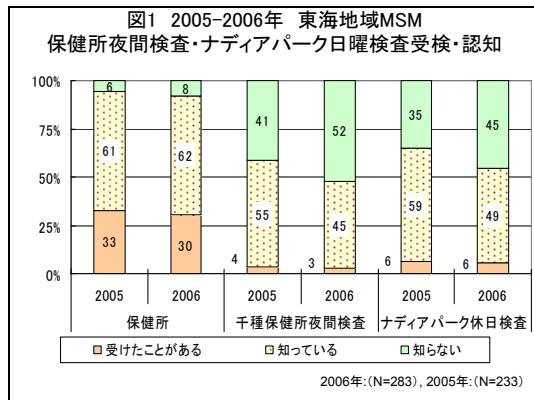
過去に HIV 抗体検査を受けたことがあると回答したものは、2005 年は 71%、2006 年は 74%、2007 年は 75%、毎回約 25-30%の受検者に対して生涯で初めての検査経験を提供していた。過去のエイズ検査経験回数も 2-5 回のものが過半数を占めていた。

2006 年と 2007 年共に全対象者の 40%以上が過去 1 年間に HIV 抗体検査を受検していた。また過去 1 年間に受検した者検査場所としては NLGR をあげるものが最も多かった。過去 1 年の検査場所として NLGR を挙げたものは減少傾向が見られた。

2) 保健所等の公的な HIV 抗体検査実施機関の利用と認知

東海地域に居住する MSM の保健所、千種保

健所の夜間検査、市が NGO に委託している休日検査の受検率、認知率を 2005-2006 年で比較すると著変は見られないものの減少傾向が見られていた(図 1)。



3) 保健所 HIV 抗体検査の利便性

保健所の HIV 抗体検査の利便性をたずねたところ、「利用しにくい」と回答したものの割合が 2005 年は 56% いたが、2006 年は 31%、2007 年は 35% と減少していた。利用しにくいと回答した者に限定し、理由を尋ねたところ「検査日が限定される」「検査時間が限定される」「検査通知までの時間が長い」が最も多い傾向は変わらなかった。

4) 希望する検査提供機関、時間、種類、立地条件、広告・評判について

2007 年には、東海地域に居住する MSM に限定し、最も希望する検査場所を尋ねたところ、イベント検査(60%)、保健所の検査(50%) を挙げるものが多く、時間帯は平日の夕方から夜間(35%)、休日の午後 5 時まで(31%) が最も多かった。

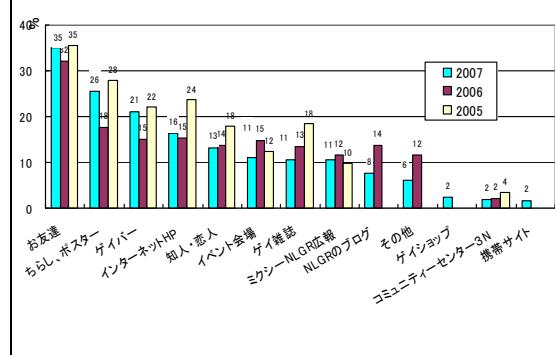
検査の種類は即日 HIV 抗体検査(57%) を希望するものが最も多かった。立地条件は名古屋駅・栄駅に近いこと(59%)、電車路線駅に近いこと(56%) を希望するものが多く、広告、評判に関しては、またゲイが多く受検している検査場所での受検を希望するものが多かった。

3. NLGR・HIV 抗体検査会の情報入手元、受検動機

1) 検査会に関する情報入手源

NLGR・HIV 抗体検査会を知ったきっかけは「お友達から聞いた」が最も多く、次に「チラシ、ポスター」が続く傾向も 3 年間変わらなかった。インターネットやゲイ雑誌、コミュニティーセンターで知った人の割合は減少傾向にある(図 2)。

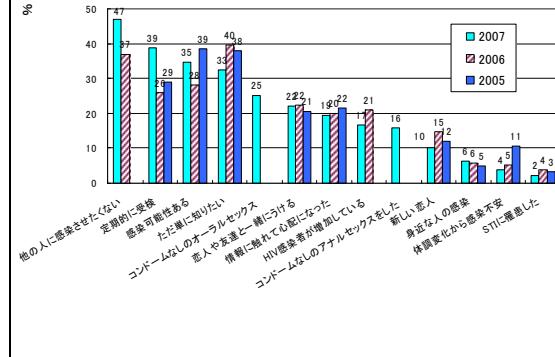
図2 NLGR検査会をどこで知ったか(複数選択)



2) 受検動機

検査受検の動機は、「他の人に感染させたくない」「定期的に受検している」「ただ単にしたりたい」が最も多い傾向が続いている(図 3)。

図3 年度別 NLGR検査会受検理由(複数選択)



4. HIV に感染した友人の有無

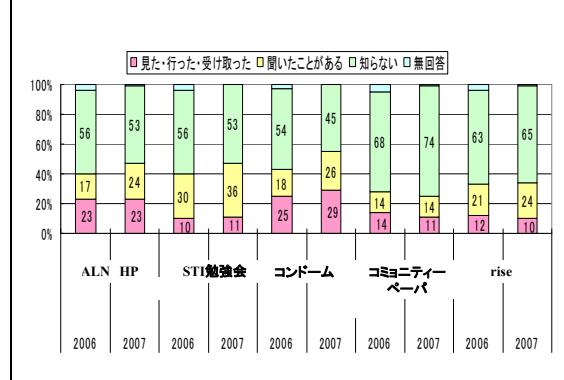
周囲にHIVに感染した友人の存在をたずねたところ、35%がいると回答し 2006 年と変化は見られなかった。

5. エンジェルライフ名古屋の活動の認知

エンジェルライフ名古屋の活動(コンドーム配布、WEB、コミュニティーウェーブ、コミュ

ニティーセンター、STI 勉強会)への接触度、参加、認知について 2006 年、2007 年と尋ねた。啓発用コンドームは 29% のものが受け取り経験を有しており、もっとも接触率が高く 2006 年と比較しても伸びが見られた (図 4)。

図4 エンジェルライフナゴヤ活動の認知



6. 性行動、コンドーム使用

1) 過去 6 ヶ月の性行動

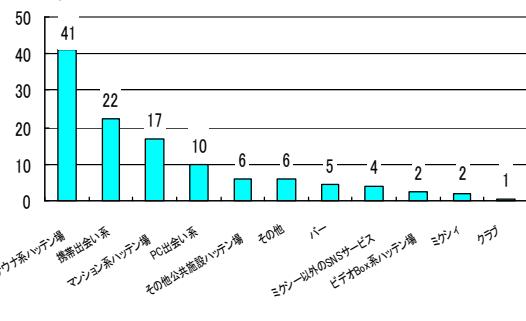
過去 6 ヶ月のアナルセックスの有無については、2007 年は 79% が、2006 年は 74% が、2005 年は 72% が「ある」と回答した。過去 6 カ月にアナルセックスの経験があるもののうち、特定の相手とのセックスでのコンドーム常用割合は 3 年間で見ると 42-47%、その場限りの相手とのセックスでの常用割合は 62-64% の間で推移していた。

2) 最後のセックスの相手とコンドーム使用

最後のセックス時のコンドーム使用は、特定の相手とは 43-48%、またその場限りの相手とは 78-82% が「使用した」と回答しており 3 年間で著明な変化は見られなかった。

最後のセックスの相手がその場限りの相手であったものに対して、会った場所を尋ねたが (2007 年のみ) サウナ系ハッテン場が 41% と最も多く、携帯の出会い系サイトが 22% と次に多かった (図 5)。

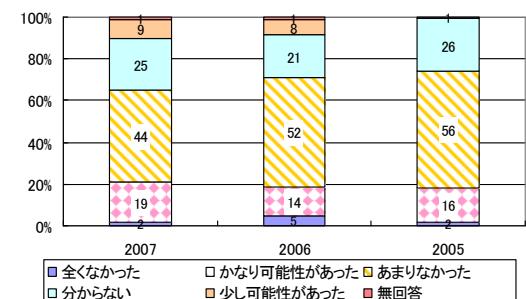
図5 最後のその場限り相手と会った場所
(2007年 N=171、複数選択)



7. 感染リスクの認識

対象者に自分の行動を振り返って、HIV に感染するリスクがどのくらいあったと思うかの問い合わせに対しては「可能性があまりなかった」と回答した割合が減少傾向にあった (図 6)。

図6 HIVに感染する可能性の認識
(MSMのみ)



8. 予防行動に対する意識・態度

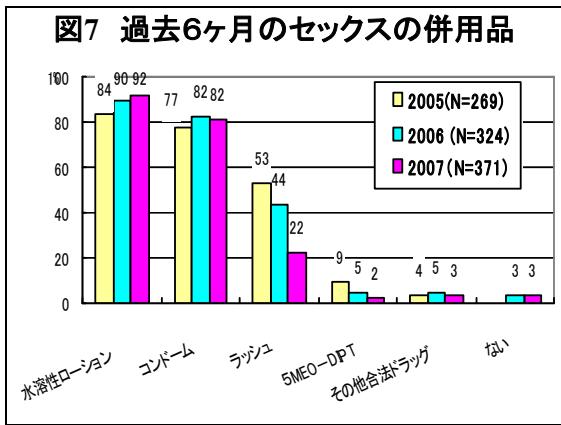
コンドーム使用など予防に対する意識、態度について尋ねた。「ゲイ友達の間でコンドーム使用が増加している」の考えには 2006-2007 年ともに 80% が同意していた。ドラッグ使用時はコンドームが使用しづらいという考えに同意するものは 47% から 36% に減少した。一方治療薬の出現により HIV 感染症を楽観視するものが多いことに同意する割合が 34% から 38% に増加した。

9. 過去 6 ヶ月のセックス時の併用品、商業施設の利用

1) 過去 6 ヶ月のアナルセックス時の併用品

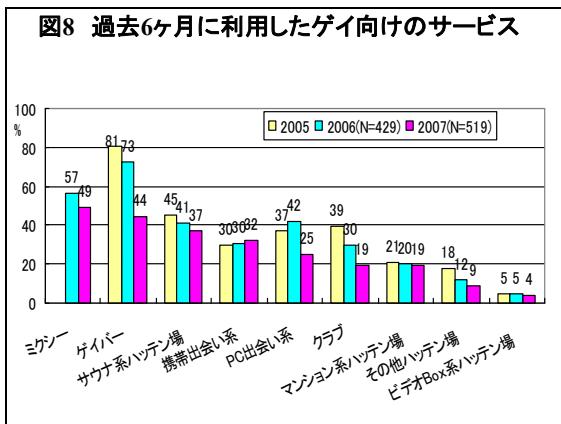
過去 6 ヶ月にアナルセックスの経験がある

ものうち、ナルセックス時の併用品を複数回答にてたずねた。水溶性ローション、コンドームを選択した者が3年とも最も多かった。ドラッグの使用経年に減少が見られた(図7)。



2) 過去 6 ヶ月に利用した商業施設やサービス

過去 6 ヶ月に利用した商業施設はゲイバー、サウナ系ハッテン場、クラブの利用割合が下がっていた(図8)。



10. 年齢別にみた検査行動とニーズ、検査会の受検動機、ALN 活動の認知度、予防行動の実態

1) 年齢が高いほど高い割合の項目

- 保健所検査の受検経験
- 生涯での検査受検経験
- HIV 陽性者の知り合いがいる割合
- エンジェルライフナゴヤの活動の認知・参加
- 過去 6 カ月のサウナ系ハッテン場の利

用割合

- 治療薬の出現により HIV 感染症を樂観視するものが増えたことに同意する割合

2) 年齢が低いほど、高い項目

- 保健所の検査が利用しにくい理由に、どのような対応をされるか不安と回答した割合
- 友達から NLGR 検査会の情報を得た割合
- 情報に触れて心配になったから NLGR を受検したと回答した割合
- 過去 6 ヶ月にセックス時にラッシュを使用した割合
- 過去 6 ヶ月にソーシャルネットワーキングサイト mixi を使用した割合

11. 検査経験別の比較

1) 検査経験があるものの方が、高い項目

- 平均年齢
- 通常保健所検査、夜間検査、休日検査の認知割合
- 保健所検査の利用しにくい理由に「日時が限定されていること」、「結果通知までの時間が長いこと」をあげた割合
- 過去 6 ヶ月のその場限り相手とのコンドーム使用割合
- 今後、特定相手とコンドームを毎回使用したいと回答した割合
- ALN の活動・プログラムの参加・認知割合
- 過去 6 ヶ月のビデオボックス系のハッテン場の利用割合
- ドラッグ使用時のコンドームが使用しづらくなるという考えに同意する割合

2) 検査経験を持たないものの方が回答割合が高い項目

- 性的指向をバイセクシュアルと自認している割合
- NLGR 検査会を「友達から聞いて知った」と回答した割合

- NLGR 検査会の受検動機として「情報に触れて心配になったから」、「友達や恋人とうけるから」という理由を挙げた割合
- 生涯を振り返って HIV に感染する可能性がどのくらいあったかについて「分からない」と回答した割合

D. 考察

2005 年から 2007 年にかけて、年齢、性的指向、居住地の分布は大きな変化が見られなかった。3 年を通して 20-30 歳代の東海地域に居住するゲイ・バイセクシュアル男性を自認している者が最も多く、今後も同様の広報やスケジュール体制で、検査会を実施した場合に来場する受検者層は大きく異ならないことが想定される。

過去に HIV 抗体検査を受検したものの割合がは年々若干上昇傾向にあり、過去 1 年間に受検した場所としては前年度の NLGR が圧倒的に多い傾向も変わらない。いかに NLGR をきっかけに地域の保健所等で実施されている検査受検に結びつけることが出来るか、より多くの検査のニーズがありながら受検経験がなかったものに検査機会を提供するための方策を考えていく必要があるだろう。

保健所の検査、保健所の夜間検査、休日検査の認知は大きく変わらないが、保健所の検査を利用しにくいと回答した割合は 2005 年と比較して 2006 年 - 2007 年は減少していた。このことは、愛知県、名古屋市のエイズ検査の担当者は NLGR にもボランティアスタッフとして、また運営スタッフとして関わっており、地域での検査体制の整備にも力を入れている成果を示すものである可能性もあり今後詳細な検討が必要である。

希望する検査体制については、イベント検査または保健所での受検希望が最も高く、平日の夕方や夜間・休日検査の希望、種類としては迅速検査、通常検査と性感染症とセット

の検査、公共交通機関のアクセスが良いこと、ゲイが多く受検していることを望むものが最もおおかたった。検査体制の整備に当たっては、検査実施日と時間の拡大がもっとも大きなポイントとなる事が考えられる。

検査会の情報はお友達から聞いた、チラシ、ポスターから知ったと回答するものが毎年最も多く、MSM 向けの宣伝戦略としては、口コミ力と紙媒体の利用が有効である事が考えられる。

エンジェルライフ名古屋の活動への参加、認知はコンドームの受け取り経験は増加傾向にあるものの、他のプログラムでは大きな変化は見られていない。今後コミュニティーセンターでのプログラムの認知拡大、コミュニペーパーなどの情報提供プログラムを強化する必要があるだろう。

感染予防行動には年次毎の変化は見られず、その場限りの相手と会った場所としては、サウナ形ハッテン場が最も多く携帯出会い系サイトを通じて会った者の割合も 2 番目に多かった。

セックス時の併用品についてはドラッグを過去 6 ヶ月に使用したと回答している割合が減少していた。法規制の影響も存在することが考えられるが、実際に使用が減っているのかについてはさらに研究を進める必要がある。

年齢別に各項目を比較すると、年齢が高いほど、保健所や生涯検査受検経験が高く、ALN の活動への参加・認知、陽性者の友人がいる割合も多かった。本検査会で受検する 30-40 歳代の層は比較的予防意識が高く、検査経験率も高い層が多いことが明らかとなった。

生涯の受検経験別に見ると、検査経験があるものの方が年齢が高く、その場限りの相手とのコンドーム使用割合や特定相手との使用意図が高かった。また、本検査会が、生涯で初めて受検であったものの方が NLGR 検査会を友達から聞いて知ったものが多く、情報に触れて心配になった、友達や恋人と受けるこ

とを受検理由として挙げているもののが多かつた。特に感染の機会がありながら、検査受検経験がなかったものへの検査機会の提供は重要となり、これらの未受検者層への効果的なアプローチ法を考案する際には友人など人的ネットワークの力、口コミの力を活用することが重要となる。

2007年の全受検者におけるHIV陽性割合は2006年より低下したものの、全受検者の基礎属性、受検経験や地域の保健所等の検査の利用や認知率には大きな違いは見られなかった。今後は、NLGRの受検をきっかけに地域で提供されている検査の利用が進むような体制を整備する必要がある。

またALNの活動やプログラムの参加・認知は年齢が高いほど高く、今後は若者層へも効果的に情報を普及・浸透させる必要がある

と性行動：検査経験別の比較、日本公衆衛生学会、2006年11月、富山

- 3) 金子典代、内海眞、市川誠一：東海地域在住のMSMのHIV抗体検査受検行動とHIV検査体制へのニーズの実態、第21回日本エイズ学会、広島

E. 発表論文等

(研究論文)

- 1) 金子典代、内海眞、市川誠一、東海地域のゲイ・バイセクシュアル男性のHIV抗体検査の受検動機と感染予防行動、日本看護研究学会誌、30巻4号、p37-p43、2007

(国際学会発表)

- 1) N. Kaneko、M. Utsumi、S. Ichikawa: HIV Testing Behavior and HIV Preventive Behavior among Gay and Bisexual Men in Tokai area Japan , The 6th International Nursing Conference, Nov, 2007, Seoul

(国内学会発表)

- 1) 金子典代、内海眞、市川誠一：MSM対象のHIV・STI検査の受検者の受検動機と予防行動、日本エイズ学会、2006年12月、東京
- 2) 金子典代、内海眞、市川誠一、東海地域の男性同性愛者のHIV抗体検査の受検動機